

## 『ソリマンとパーシダの悲劇』におけるロードス島

### ——キッドの反トルコ感情の舞台化——

Rhodes in *The Tragedie of Soliman and Perseda*  
—A Dramatization of Kyd's Anti-Turkish Sentiments—

石橋敬太郎\*

Keitaro ISHIBASHI

Thomas Kyd's *The Tragedie of Soliman and Perseda* was written in 1592. The play represents the foundations of Soliman's super power above law, though the historical figure of the Ottoman Sultan is known as a "law maker." Kyd shows to the Elizabethan audience the state of lawlessness and tyranny in Soliman. There is enough cruelty in the Turkish law system of the play which detracts Soliman's history from his reputed ingenuity, practicality, and simplicity. Kyd's play truly represents his sentiments who reject the Turkish super power. This alternate representation of Soliman also serves to provide a significant context for the play in order to reveal fundamental ambiguities and contradictions of England's political and military relationship with Turkey at the time of the play's composition and performance. Confronted by a Spanish threat, Queen Elizabeth tried to establish a strategic alliance with Turkey. This paper illuminates that the playwright did not show Turkey to be a reliable partner for England, unlike the prospects of the Elizabethan government.

**Keywords:** *Islam, Turkey, Foreign Policy*  
イスラム, トルコ, 外交政策

#### 序

1592年11月22日、書籍出版業組合の登録簿に、ロンドン主教で長官でもあったスタイロップ(Styrop)による署名のもと、エドワード・ホワイト(Edward White)のために『ソリマンとパーシダの悲劇』(*The Tragedie of Soliman and Perseda*)が登録され、エドワード・オールド(Edward Alde)によって出版された(Boas liv-iv)。上演された劇団などの詳細はわかっていない。出版は、現存している2種類の四折本の奥付の日付から1599年とされている。しかし、作者の名前は記載されておらず、それを示す外的な証拠もない。従って、従来の批評家の関心は、本劇の作者をめぐる問題であった。なかでも、フレデリック・S・ボア(Frederick S. Boas)やF・G・フリー(F. G. Fleay)は、文体やトマス・キッド(Thomas Kyd)の『スペインの悲劇』(*The Spanish Tragedie*)においてヒエロニモ(Hieronimo)が演じる劇中劇のプロットとの類似から、本劇をキッドの作品とみなしている(Chambers IV: 46-47)。最近では、作者の問題とは別に、ナビル・マター(Nabil Matar)が史実を駆使してイスラム教徒に改宗したキリスト教徒の現状を明らかにし(52-53)、マッシュウ・ディモック(Matthew Dimmock)は、ソリマン(Soliman)のパーシダ(Perseda)に対する性的な欲望をトルコ帝国によるキリスト教国支配と結び付けた(191)。さらに、リンダ・マクジャネット(Linda McJanett)は、愛する人や信頼に値する側近を次々と殺害するソリマンのなかに

古代ユダヤの王ヘロデの怒りを見出した(82-83)。それでは、劇作家の歴史意識についてはどうであろうか。いずれもイスラム世界に光を当てた優れた論考であるが、スレイマン一世(Süleiman I)時代の歴史を現在に再現する意味については触れていない。

この問題を考える前に、本劇を簡単に紹介しよう。ロードス島の騎士エラストス(Erastus)とパーシダの愛と死など劇全体のアクションは、三人の女神「愛」「運命」「死」によって作り出される劇中劇として構成されている。そして舞台では、トルコによる1522年のロードス島征服を背景として、トルコ皇帝スレイマン一世を体現するソリマンの歴史的に根拠のない独りよがりな愛欲が展開し、彼の食欲や残虐などが示される。すなわち、劇中では、奴隷の娘であったスレイマン一世の最愛の妻ヒュッレム・スルタン(Hurrem Sultan) (ヨーロッパではロクセラナ(Roxolana)として知られている)への献身には言及されず、エラストスの恋人パーシダに横恋慕するソリマンが描出されている。その際に、エラストスを陥れようとするトルコの権力者たちは、法的手続きを無視して、彼に反逆罪を着せる。証言の誓いとして使われるコーランも偽証に利用され、法的にも宗教的にも無秩序なトルコが示される。

ところが、歴史上のスレイマン一世は、在位期間中(1520年~1566年)に13回におよぶ対外遠征を行い、数多くの軍事的成功をおさめて、帝国を最盛期に導くとともに、法典を編纂し

\* 国際文化学科

帝国の制度を整備したことから「立法帝」としてイングランドでも知られていた(AI-Olaqi 36-37)。スレイマンはまた、芸術家や哲学者たちのパトロンであり、帝国の文化的な黄金時代を導いた皇帝でもあった。それではなぜ、劇作家キッドは、歴史とは異なるトルコ皇帝スレイマン一世の治世を 1592 年に執筆したのであるのか。その解答の糸口を見出すうえで、当時の東地中海支配をめぐる国際情勢に目を向けてみたい。その頃と言えば、トルコは、北アフリカ、小アジアやギリシャなど地中海周辺地域を席卷し、イタリア国境に達していたほか、ユーゴスラビアやオーストリアなどに迫る勢いを示していた(AI-Olaqi 51)。そのとどまることを知らない勢いは、劇中のソリマンの兄弟ハレブ(Haleb)の言葉「おお、ソリマン、陛下の名声は敵を震わせております。ちょうど秋風に吹き飛ばされた枯葉のように」(“Ah, Soliman, whose name hath shakt the foes, / As withered leaues with Autumne thrown downe”) (I. v. 29-30)<sup>1</sup>で要約されよう。

こうした国際情勢のなかで、1588 年のアルマダ撃滅後も続くスペインのイングランド侵攻という脅威を払拭するために、イングランド政府はトルコとの軍事的同盟を模索していた。すなわち、エリザベス政府は、プリマスなど沿岸主要都市を要塞化したほか(Harrison I: 85)、スペインやギーズ家を指導者とする旧教同盟を敵にまわしたアンリ四世を支援するため、フランス沿岸に位置するブリタニー、ディエップやノルマンディーに援軍を送り、スペインによる侵攻を阻止しようとしたのだが、まったく功を奏さなかった<sup>2</sup>。そこで、イスラム教を奉じるトルコをカトリックの懲罰者とみなす神学者たちの見解に支えられて(Vitkus 8)、エリザベス政府は親トルコ政策に傾斜していたのである。その一方で、トルコ人に改宗を迫られたイングランド商人の恐怖をつづつたパンフレット、あるいはトルコの残虐さを繰り返して訴える作品などが出版された。ロンドンで上演されたトルコを題材とした作品も、多かれ少なかれ、反トルコ感情に訴えている。そうした感情の背景には、歴代のトルコ皇帝に関する初期近代の著作物のなかで、支配者たちの家族殺しや信頼に値する側近に対する突然の処刑といった残酷さなどが記載されていたことが挙げられる。

キッドの『ソリマンとパーシダの悲劇』もこの系譜に位置づけられることは、繰り返すまでもない。それにしても、ロードス島を包囲した後も、ハンガリー、エジプトやイエメンなどを征服し続けたスレイマン一世が、史実とは異なり、決闘で倒した相手がパーシダであることを知り、毒を盛った彼女の唇に口

づけをして、この世を去るという筋立てはどのように考えたらよいのであろうか。しかも、劇中には、1590 年代初頭の東地中海をめぐる国際情勢を思わせる出来事がいくつか描かれている。このことは、本劇を執筆当時のイングランドとトルコとの外交関係に位置づけて読み込むことを可能にしている。以下においては、エリザベス政府の親トルコ政策を疑問視して、同国との関係を断ち切ろうとするキッドの見解を劇中に見出してみたい。その結果、キリスト教国とイスラム教国がせめぎあうバリー地域でのトルコ支配をスペイン勢力に対する有効な平衡力として示すジョージ・ピール(George Peele)の『アルカザールの戦い』(*The Battle of Alcazar*) (1589) (McJannet 84)や、マキアヴェリに支配原理を仰ぎ、東地中海地域を脅かし続ける恐怖を描くロバート・グリーン(Robert Greene)の『トルコ皇帝セリムの悲劇』(*The Tragedie of Selimus, Emperor of the Turks*) (1591) とは異なるキッドの見解が浮かび上がるはずである。

## I

舞台は、ロードス島の騎士エラストスが、本島の統治者フィリッポ(Philippo)の義理の息子サイラス王子(Prince of Cyprus)の婚礼の儀式に向かうため、恋人パーシダに別れを告げようとする場面で始まる。サイラス王子の婚礼の祝宴には、トリポリのトルコ人、マルタ島の騎士、スペイン、フランスやイングランドなどの騎士が集まり、エラストスも招待されている。別れに際して、パーシダは、祖母の形見である鎖を彼に贈る。本劇のアクションは、祝宴での馬上槍試合において、エラストスがパーシダから贈られた鎖を紛失し、それをフェルディナント(Ferdinando)が拾ったことから大きく展開する。すなわち、フェルディナントは、その鎖を恋人ルシナ(Lucina)に贈るのだが、エラストスは、無言劇のなかで、ルシナからその鎖を取り戻す。それに気づいたフェルディナントとエラストスとの間に争いが生じ、エラストスはフェルディナントを殺害してしまう。そして、事件の発覚を恐れるエラストスは、トルコ皇帝ソリマンを称賛して、トルコに逃亡するのである。

これらの場面において最初に着目したいのは、ロードス島がトリポリ、フランスやイングランドなどキリスト教世界とイスラム教世界の文化的あるいは政治的な接触面として位置づけられていることである。周知のように、ロードス島は、エーゲ海南部のアナトリア半島沿岸に位置し、東地中海における海上交

<sup>1</sup> 以下、キッドからの引用および幕場行数すべては、Frederick S. Boas, ed., *Soliman and Perseda in The Works of Thomas Kyd* (Oxford: Clarendon P, 1955) に拠る。

<sup>2</sup> たとえば、1591 年 5 月、スペインを中心とするカトリック勢力がフランス沿岸をイングランド侵攻の足場としたとき、サー・ジョン・ノリス(Sir John Norris)は、ブレストからサン・マロまでの沿岸を守るように命じられた。また、同年 8 月、サー・ウィリアム・ロジャーズ(Sir William Rogers)と合流したエセックス伯爵ロバート・デヴルー(Second Earl of Essex, Robert Devereux)は、パリを荒らしたばかりのパルマ公(Duke of Parma)によるルーア

ン攻撃からアンリ四世(Henry IV)を守るために、ディエップで待機していた。しかし、アンリ四世の戦局はあまりにも絶望的であった。翌年、ノリスは撤退を余儀なくされ、エセックス伯爵は帰国を命じられた。後に、トルコやモロッコとの軍事的な同盟に懐疑的なエセックスを中心とするハワード卿チャールズ(Lord of Howard, Charles)やサー・フランシス・ヴェール(Sir Francis Verre)といった司令官たちは、愛国主義的なナショナリズムに支えられて、スペイン本土攻略計画を着々と進めることになる(Black 414-18)。

易の重要な拠点でもあった。そのロードス島の統治者フィリップは、キリスト教とトルコの騎士を熱烈に歓迎する。そして彼は、サイプラス王子やきらびやかに居並ぶ騎士たちの前でフランス人やイングランド人を称賛する。ここには、過去に本島の支配をめぐり、さまざまな軍隊によって繰り返されてきた攻撃の痕跡は見当たらない。

むしろ、華やかな雰囲気の中、戦場で功績をあげた騎士たちによる馬上槍試合が繰り返される。その際に、フィリップは、義理の息子の婚礼の儀式を騎士たちの武勲で飾ろうと言う。その一人であるイングランドの騎士は、「そなたがその駿馬に拍車をかけるときのモットーはいかに」(“What is thy motto, when thou spurres thy horse?”) (I. iii. 16) と彼に問われたとき、自身の経歴を次のように述べる。

In Scotland was I made a Knight at armes,  
Where for my countries cause I charged my Lauce:  
In France I tooke the standard from the King,  
And gained the flower of Gallia in my crest:  
Against the light foote Irish haue I serued,  
And in my skinne bare tokens of their skenes;  
Our word of courage all the world hath heard,  
Saint George for England, and Saint George for me.

(I. iii. 17-24)

本劇が 1522 年のトルコ皇帝スレイマン一世によるロードス島征服を背景としていることからするならば、劇中のイングランド騎士の武勲は、当時の英仏間の戦いに言及していることになる。すなわち、トルコのヨーロッパ南東部への帝国拡大に対する抵抗を目的として、フランスと神聖ローマ帝国から同盟を求められていたイングランドは、1520 年の金襴の陣においてフランスとの友好を深めたのだが、翌年にイングランドの枢機卿トマス・ウルジー(Thomas Wolsey)がフランスと敵対する神聖ローマ皇帝カール五世(Charles V)との同盟を取り決めた後、再び英仏両国の関係が悪化した事実を表している。

また、スレイマン一世の指揮のもと、ペルシャと戦った経験のある司令官ブルーザー(Brusor)は、アフリカの砂漠でムーア人と戦ったうえ、北アフリカの海岸に沿ってスペインの端までトルコ人を導き、キリスト教徒をマホメットの前に膝づかせたと、サイプラス王子に言う。このブルーザーの武勲は、スレイマン一世時代の対外遠征に言及している。さらに、フランスの騎士は、イタリアで武人として誉れ高いローマ人と戦ったと、王子に誇らしげに語る。確かに、劇中の騎士たちの武勲は、1520 年前後の歴史を裏書きしているのだが、彼らがロードス島でサイプラス王子の婚礼の儀式に出席したという証拠はない。むしろ、騎士たちの経歴は、1588 年以後のヨーロッパやトルコの政情をロードス島に映し出しているように思われる。すなわち、1590 年代のフランス沿岸におけるイングランドのスペインをはじめとするカトリック諸国との戦い、北アフリカのトルコの摂政管

区バーバリー地域で生じたモロッコ人の反乱や、トルコの同盟国フランスのイタリア遠征を思い出させてくれる。

イングランドの騎士が登場していることも、本劇がスレイマン一世時代の過去を再現するのみならず、1590 年代初めの東地中海を取り巻く政情にイングランドが深く関与していることを伝えてくれる。このような国際情勢を背景として、劇中ではエラストスがトルコ人を倒して勝利をおさめる。華麗なエラストスの活躍とは裏腹に、トルコでは、歴史上のスレイマン一世を体現する皇帝ソリマンがロードス島征服を思いめぐらす場面が後に続く。劇中では言及されていないものの、トルコにとって、ロードス島征服は東地中海におけるコンスタンティノープルとカイロとの間の円滑な商品流通に寄与するものであった。1580 年に、トルコ皇帝ムラト三世がイングランド商人にトルコ全領域における貿易上の権利と特権を認め、また翌年にエリザベス女王がレヴァント会社に特許状を認めて以来(Black 241-42)、当時のイングランド人にとって、ロードス島は決して遠い存在ではなかったであろう。スペインの脅威を払拭するために、エリザベス政府がトルコとの商業的な結び付きを政治的に利用していたことも思い出すとき、ソリマンの舞台登場は、イスラム世界に対するイングランド人の関心にかななかったものであったにちがいない。

## II

ロードス島征服を決意した劇中のソリマンは、ペルシャ、ロシアやポーニア(ポーランド)から兵士を呼び戻すことについて兄弟のハレブとアムラス(Amurath)に意見を求める。本劇が執筆・上演された時期の東地中海支配をめぐる国際情勢を文脈とすると、トルコがペルシャと交戦中であることを理由として、兵士を本国に呼び戻すことに反対するハレブの言葉は注目に値する。彼の言葉には、当時の中東情勢を彷彿とさせる時局的な言及が垣間見えるのである。すなわち、1590 年には、トルコとペルシャとの間で休戦協定が成立していたのだが、その後も両国は会戦に備えて着々と準備を進めていた。ペルシャでは、イスマーイーラー一世(Ismael I)がクズルバシュ(Qizilbash)(スンニー派トルコ人がサファヴィー朝の創設者イスマーイーラー一世を支援したシーア派トルクメンの七部族に与えた呼称)の党派争いによる内乱状態を回復し、再びトルコと戦う目的で、同国に倣った常備騎兵軍イエニチェリを組織していた(Dale 91-94)。もちろん、トルコは、ペルシャの動きに無関心ではなく、会戦に備えていた。

そのような文脈の中、劇中のアムラスは、兄ソリマンの決意に異議を唱えたことによりハレブを殺害する。また、ポーニアについては、トルコ皇帝ムラト三世(Murad III)が 1593 年にタタール王に命じてポーランドと戦ったことが思い出される(Hakluyt 6: 72)。続いて観客が見るものは、ソリマンが兄弟殺しの罪でアムラスを殺害し、これを嘆く彼の姿である。

Nay, wretched *Solyman*, why didst not thou  
 Withould thy hand from heaping bloud on bloud?  
 Might I not better spare one ioy than both?  
 If loue of *Haleb* forst me on to wrath,  
 Cursd be that wrath that is the way to death.  
 If iustice forst me on, cursd be that iustice  
 That makes the brother Butcher of his brother.

(I. v. 105-11)

兄弟殺しに次ぐ兄弟殺し。その残虐さは、エリザベス朝においてステレオタイプなトルコ表象のひとつであったであろう(Foxe I: 370-91)<sup>3</sup>。ソリマンの嘆きは、こうしたステレオタイプとは異なるトルコ人を作り出しているかのようと思われる。同じことは、ソリマンに対するエラストスの思いからもわかる。すなわち、エラストスは、馬上槍試合でパーシダからの贈物である鎖を紛失したことがもとでフェルディナントを殺害した後、敵にもかかわらず、「トルコ皇帝の名声、英雄そして国王にふさわしい美徳」(“the King renound / For all heroyicall and kingly vertues”) (II. i.270-71)を称賛し、コンスタンティノーブルに逃亡する。確かに、ソリマンは、エラストスとの出会いの場面において、人々の不平を聞き、無実な人々を守る正義をもちあわせ、貧民を憐れむこともできると述べて、彼の申し出に耳を貸す。

さらに、ソリマンは、エラストスの勇気を試すため、決闘を申し込んで敗れたとき、彼の求めに応じてキリスト教徒として生きる自由と、ロードス島攻撃ではなく、ペルシャ人やムーア人との対外戦争に従事することを認める。

No suffer this or that to trouble thee:  
 Thou shalt not neede *Phylippo* nor his Isle,  
 Nor shalt thou war against thy Countrimen:  
 I like thy virtue in refusing it, . . .

(III. i. 138-41)

この台詞からわかるように、もともとキリスト教徒を野蛮人とみなしていたはずのソリマンは、宗教には寛大であり、それこそ当時のエリザベス朝政府が思い抱いていたトルコ人であったであろう。事実、エリザベス女王は、ムラト三世に頻繁に書簡

を送り続け、1590年にはスペイン撃滅のためトルコから軍事的協力を得ていた。また、本劇が執筆された1592年に、エリザベス女王は、ムラト三世にスペインを攻撃するよう説得する準備も整えていた(Thomas and Tydeman 297)。ペルシャのほか、ムーア人との戦いへのエラストスの言及も、北アフリカのトルコの摂政管区バーバリー地域で生じているモロッコの反乱を思い出させ、もはや本劇が1522年に生じたロードス島攻撃時の時空を超えて、当時の出来事を描いている印象を与える。その間、エラストスに贈った鎖について事実を知ったパーシダと、先に彼女に復讐を求められたバシリスコ(Basilisco)は、彼を追ってコンスタンティノーブルへと向かう<sup>4</sup>。

しかしながら、パーシダたちがコンスタンティノーブルに到着して間もなく、トルコ人による激しいロードス島攻撃が始まる。この戦いでは、ロードス島の統治者フィリップと彼の義理の息子サイラス王子が殺害される。トルコが圧倒的な勝利をおさめたとき、観客が目にするものは、イスラム教への改宗を迫るトルコ人の脅威である。すなわち、トルコ軍の司令官ブルーザーは、ロードス島の囚人たちに「囚人たちは何と言う？トルコ人になるのか、ならないのか」(“What say these prisoners? Will they turne Turke, or no?”) (III. V. 7) と、高圧的に改宗か死の選択を迫る。そして、ブルーザーの求めに応じず、改宗を拒否したフィリップの部下ジュリオ(Julio)とゲルピオ(Guelpio)は殺害される。ただし、パーシダのために生きることを望むバシリスコは改宗に応じる。

キリスト教徒の改宗をめぐるエピソードが執筆された背景には、旅行者などによって、バーバリー沿岸で身代金を支払われないイングランド人の捕虜がイスラム教に改宗するという情報がイングランドに広がりつつあったことが挙げられよう。そのように考えてみると、エリザベス政府の親トルコ政策がクライマックスを迎えつつあった時期、トルコ人に改宗を求められる場面が観客の前に提示された意義は大きい。すなわち、トルコは必ずしもキリスト教に寛大ではない。彼らは、征服した人々に次々と改宗を迫る部族であることを能弁に物語っている。ロードス島陥落を喜ぶソリマンも、「ロードス島は征服された。住民どもは皆殺しにされよう。マホメット教を奉じることになる少数の者を除いてはな」(“Rhodes is taken, and all the men are slaine, / Except some few that turne to Mahomet”) (IV. i. 41-42)と述べてい

<sup>3</sup> フォックスは、イスラム教徒の暴力と彼らの危険性に対して、彼の『殉教者の書』(*The Acts and Monuments of the Church Containing the History and Sufferings of the Martyrs*)(1563)の「トルコ史」の終わりにある「トルコ人に対する祈り」のなかで、「万軍の主よ、そなたの教会にこれらトルコ人、サラセン人、タタール人に対して、ゴグとマコグに対して力と勝利をお認めください。そなたの息子イエス、わが主であり、救世主の敵、悪意に満ちた反キリストの民に対して」と訴えている。当時のイングランド人は、このようなフォックスの言葉を通してイスラム教徒に対する見解を形成したと言われている(MacLean and Matar 26-27)。

<sup>4</sup> ナビル・マター(Nabil Matar)によると、バシリスコは、初期

近代イングランドの演劇に初めて登場したイスラム教に改宗したキリスト教徒である(52-53)。バシリスコは、性的な欲望はもちろんのこと、イスラムの軍隊における高い評価と給料に魅せられてイスラム教に改宗し、キリスト教国を捨てる。キリスト教徒の改宗を扱う演劇作品は、ジェイムズ一世がイングランドの王位を継承した後に、次々と執筆・上演された。主な演劇作品として、ロバート・ダボーン(Robert Daborn)作『トルコ人となったキリスト教徒』(*A Cristian Turned Turk*)(1611)、ジョン・フレッチャー(John Fletcher)作『島の女王』(*The Island Princess*)(1619)、フィリップ・マッシンジャー(Philip Massinger)作『背教者』(*The Renagado*)(1624)などがある。これらの演劇作品が描く改宗の主題の時局的な意味については、稿を改めて論じたい。

た。しかも、捕らえられた女性は、皇帝の手によって部下に与えられる。これを例証するかのよう、劇中のルシナは、ブルーザーに与えられる。パーシダはソリマンの愛妾にされようとする。そして、改宗を拒む彼女は、徹底的にソリマンに威嚇される。

### III

執拗なソリマンの求めに圧倒されそうなとき、エラストスとパーシダは再会する。そのとき、ソリマンは、二人の結婚を認めるなど寛大な姿勢を示すほか、エラストスをロードス島の統治者に任命する。前の場面において、確かにエラストスは、ソリマンの優しさを認め、信仰の問題に悩んでいた。ここで、ソリマンの宗教観をまとめるなら、愛する人々の信仰には寛大であり、征服された者には容赦なく改宗を迫るものと言えるであろう。さらに、歴史とは異なり、劇中のトルコでは、コーランや司法権が為政者によって不正に扱われている事実も見逃せない。それは、エラストス、パーシダとソリマンによるラブ・ロマンスが、ソリマンの嫉妬により急展開するエピソードに見出せる。二人の結婚を認めたことに後悔し、再びパーシダを手に入れようとするソリマンの欲望は、キリスト教国の差し迫った危機としても示されているのだが(Al-Olaqi 42)、そればかりではない。劇中では、ロードス島征服の功績にもかかわらず、エラストスが本島の統治者になったことに不満を抱くブルーザーが地位を求めて、ソリマンにエラストス殺害をほめめかす場面が示される。

This shall be the means: Ill fetch him backe again,  
Vnder couler of great consequence;  
No sooner shall he land vpon our shore,  
But witnes shall be ready to accuse him  
Of treason doone against your mightines,  
And then he shall be doombd by marshall law.

(IV. i.244-49)

ブルーザーの計略を聞いたソリマンは、エラストス殺害がうまくいけば彼をトリボリの総督とし、ルシナをその王妃にする約束する。トリボリは、バーバリー地域にあるオスマン摂政管区に位置し、イングランド商人の北アフリカ貿易拠点のひとつであった。ロードス島、コンスタンティノーブル、そしてトリボリ。これらの地域は、キリスト教世界とイスラム教世界との商業的あるいは政治的な接触面としてエリザベス朝イングランド人によく知られていた。そのような事実を背景とすると、自己の利益のためには、キリスト教徒を罠にかけることを厭わないブルーザーの計略はどのように考えたらよいのであろうか。ブルーザーの罠にかかったエラストスは、トルコの船に火をかけた容疑、すなわち反逆罪で逮捕される。その際に、マーシャ

ル卿(Lord Marshal)は、エラストスの反逆を偽称する証人たちにコーランにかけて事実を述べるように命じる。

*Marsh.* This all is true that heere you haue declar'd,  
Both lay your hands vpon the Alcaron.

1. *Witm.* Foule death betide me, if I sweare not true.

2. *Witm.* And mischief light on me, if I sweare false.

(V. ii. 71-74)

コーランは、イスラム教の聖典で、唯一神アッラーが最後の預言者に任命されたムハンマドに対してくださった啓示として位置づけられていたはずである。エリザベス朝にあつて、イスラム教は、カトリック主義に対抗し、プロテスタント主義を守るための宗教として評価されてきたが(Vitkus 8)、コーランが虚偽に利用される場面を見た観客にはどのように映ったのであろうか。謀られたことを知ったエラストスのソリマンの不誠実さに対する非難は、その解答を与えてくれる。それに、このマーシャルは、法的手続きに沿ってエラストスの反逆の証拠を求めることもなく、彼をイエニチェリに絞殺させる。これら東地中海を舞台として展開する一連のアクションは、トルコをどのように見るかに関する劇作家の思いを能弁に物語っているような気がしてならない。

### IV

続く場面において、ソリマンは、エラストスを絞殺した二人のイエニチェリを殺害するほか、偽証した二人の証人を塔の上から突き落とすようにマーシャルに命じる。マーシャルもまた、ソリマンの命令によって殺害される。トルコでは、皇帝の意思が法としてまかりとおっている。ソリマンの墮落、不正や暴君性は、歴史上のスレイマン一世の立法帝としての名声をくつがえすのに十分であったであろう。キッドのソリマンは、誠実な友情を蔑ろにし、次々と無実な人間を殺害する人物としても描かれている。劇中では、前にイスラム教に改宗したバシリスコの再改宗の間に、ピストン(Piston)からエラストスの死について知らされたパーシダは、その共犯者として、今ではブルーザーの妻となったルシナを殺害し、ロードス島をトルコ人から守ろうとする。

No, let her lie, a prey to rauening birds:  
Nor shall her death alone suffice for his;  
Rhodes now shall be no longer *Solymans*:  
Weele fortifie our walles, and keepe the towne,  
In spighte of proud, insulting *Solyman*.  
I know the lecher hopes to haue my love,  
And first *Perseda* shall with this hand die  
Then yeeld to him, and liue in infamie.

(V. iii.55-62)

この台詞のなかで、パーシダは、ソリマンに屈し、不名誉を被ったまま生きるよりはむしろ、自害することを望むと言う。そして、ソリマンがロードス島の人々と談判をするために現れたとき、パーシダは、男装して城壁に姿を見せる。それぞれの主張が物別れになったとき、ソリマンはパーシダに決闘を申し込む。本劇が執筆されたときには、すでに過去のものとなっていた決闘だが、キリスト教のロードス島をイスラム教世界から守ろうとするパーシダには、穏やかな顔つきをして寛大な姿勢を示しながら、敵には虐殺と改宗を迫るトルコ人の本質に対する挑戦が示されている。

パーシダの挑戦は、対スペイン外交上、トルコ人の本質を見抜けないまま、親トルコ政策を推進しようとするエリザベス政府に突き付けているようにさえ思われる。事実、トルコ皇帝ムラト三世を「オーストリア、ハンガリー、ポーランドやヘルヴェチアの未征服地と、ギリシャに隣接する他のキリスト教国の苦しみ」を望みながら、「ギリシャ帝国の篡奪した座で輝いている」と糾弾するパンフレット作者も存在していた(Dimmock 191)。これを例証するかのように、劇中では、力では圧倒的に有利なソリマンが彼に抵抗を企てたパーシダを殺害する。そればかりか、このトルコ皇帝は、バシリスコ、ピストンなどキリスト教徒を殺害し続ける。トルコの前では、キリスト教徒はなすすべもない。しかも、ソリマンは、突如、エラストスの礼儀正しさや英雄にふさわしい行動を口にしただけの部下ブルーザーを断頭台へ送る。一時の感情に任せて、腹心ともいえる部下の命を奪い取るトルコの皇帝に対して観客が抱くのは、いつ裏切られるのかわからない疑いと恐怖であったであろう。

終幕において殺害した相手がパーシダであることがソリマンは、彼女の唇に口づけをする。そして彼は、唇に毒が盛ってあるとするパーシダの手紙を読んだ後、息絶える。歴史では、この戦いでスレイマン一世は、この世を去っていない。ロードス島包囲後も、スレイマン一世は、ハンガリー、エジプトやイエメンなどを席卷し、帝国の最盛期を築き上げた。そして1566年、神聖ローマ皇帝マクシミリアン二世(Maximilian II)がトルコとの協定を破り、ハンガリーを攻撃した報復のために同国を包囲中に没した。この歴史の書き換えのなかで、劇作家がトルコ皇帝を葬り去ろうとする強い思いが感じ取れる。アルマダ撃滅後も続くスペインによる脅威を払拭するために、エリザベス政府の親トルコ政策が高まるなか、イスラム世界を扱った作品が次々と執筆・上演された。

そうした劇場の風潮を前にして、キッドは、トルコとの政治的な関係を断ち切ろうとする作品を描いた。彼の作品には、同時代に執筆・上演されたイスラム世界を扱った作品とは多少異なる相貌が表れている。すなわち、キッドは、バーバリー地域のトルコ支配をスペイン勢力に対する有効な平衡力として描いたジョージ・ピールの『アルカザールの戦い』や、マキアヴェリに支配原理を仰ぎ、東地中海地域を脅かし続ける恐怖をつづ

ったロバート・グリーンンの『トルコ皇帝セリムの悲劇』よりもはるかに強い反トルコ感情を観客に訴えていたのである。

#### Works Cited

- Al-Olaqi, Faud Mohammed Taleb. "The Oriental Other: Soliman the Magnificent in Kyd's *Soliman and Perseda*." *Frames*, 2013, 17, 1, 35-54.
- Black, J. B. *The Reign of Elizabeth 1558-1603*. Oxford: Clarendon Press, 1987.
- Chambers, E. K. *The Elizabethan Stage*. Vol. IV. Oxford: Clarendon Press, 1923.
- Dale, Stephen F. *The Muslim Empires of the Ottomans, Safavids, and Mughals*. Cambridge: Cambridge University Press, 2013.
- Dimmock, Matthew. *New Turkes: Dramatizing Islam and the Ottomans in Early Modern England*. London and New York: Routledge, 2005.
- Foxe, John. *The Acts and Monuments of the Church Containing the History and Sufferings of the Martyrs*. Ed. M. Hobart Seymour. Part 1. Charterhouse Square, 1838.
- Hakluyt, Richard. *The Principal Navigations, Voyages, Traffiques and Discoveries of the English Nation*. Vol. VI. Cambridge: Cambridge University Press, 2014.
- Harrison, G. B. *Elizabethan and Jacobean Journals 1591-1610*. Vol. I. London and New York: Routledge, 1999.
- MacLean, Gerald and Nabil Matar. *Britain and the Islamic World, 1558-1713*. Oxford University Press, 2011.
- McJannet, Linda. *The Sultan Speaks: Dialogue in English Plays and Histories about the Ottoman Turks*. New York: Palgrave Macmillan, 2006.
- Matar, Nabil. *Islam in Britain 1558-1685*. Cambridge: Cambridge University Press, 1998.
- Thomas, Vivien and William Tydeman, eds. *Christopher Marlowe: The plays and their sources*. London and New York: Routledge, 1994.
- Vitkus, Daniel. *Three Turk Plays from Early Modern England: Selimus, A Christian Turned Turk, and the Renegado*. New York: Columbia University Press, 2000.

本稿は、令和元年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）（基盤研究（c））（課題番号：17K02532）の成果の一部である。